

第五編

主権者または国家の歳入

第一章 主権者または国家の支出（一）

第一部 国防の支出（一）

統治者、主権者、政府の第一の務めは、他国による武力攻撃や侵略から自国を守ることであり、そのための実効的な手段は軍事力に限られる。ただし、その軍事力の平時における整備・維持や装備の調達、戦時の運用に要する費用は、社会の構造や状況、発展段階や改良の過程によって大きく異なる。

北アメリカの先住民部族に典型的な、狩猟社会のごく初期段階では、男たちは皆、狩人であると同時に戦士でもある。戦いに向かう目的は共同体の防衛か、他の共同体から受けた被害への報復であり、従軍中も家にいるときと同じように自らの労働で糧を得る。この段階には、厳密な意味での主権者も国家として組織された共同体も存在せず、共同体が出征準備や従軍中の糧食・生活維持の費用を負担することもない。

タタールやアラブに見られる発達した牧畜社会では、成人男性は等しく戦士で、定住せず移動に適した天幕や幌付きの荷車で暮らし、部族全体で季節や状況、不測の事態に応じて移動する。家畜の群れが草を食べ尽くせば次の土地へ、乾季には川沿いへ、雨季

3 第一章 主権者または国家の支出（一）

には高地へと移る。戦の際にも、家畜を老人や女性、子どもに任せて自分たちだけが出陣したり、彼らを無防備のまま置き去りにしたりはしない。日ごろから遊牧生活に慣れているため、軍勢として進もうと牧夫の一団として動こうと、暮らしぶりはほとんど変わらず、異なるのは目的だけである。ゆえに皆がそろって戦いに向かい、それぞれが力を尽くす。タタールでは女性が戦闘に加わる例も少なくない。勝てば敵部族の財産は戦利品となるが、敗ればすべてを失い、家畜だけでなく女性や子どもも勝者の戦利品となる。生き延びた者の多くは当座の糧を得るため勝者に服属し、残る者は砂漠や荒野へ散っていく。

タタール人とアラブ人にとって、日々の暮らしも鍛錬も、そのまま戦への備えである。走る、組み打ちをする、棍棒を振るう、槍を投げる、弓を射るといった野外の遊びは、いづれも実戦に直結する。出陣の際にも平時と同様に家畜の群れを伴い、それを糧として自活する。両者の社会にも首長や君主はいるが、統治者が兵の戦支度に公費を投じることはない。兵が戦場で期待できる見返りは、戦利品にあずかる機会だけである。

狩猟民の軍勢は多くても二、三百人規模にとどまり、狩猟に依存する不安定な糧に支えられるため、その規模を保ったまま長くまとまって行動し続けるのはほぼ不可能であ

る。これに対し、牧畜民の軍勢は時に二十万から三十万に達し、進軍を阻む要因も少ないうえ、食い尽くした牧草地から草の残る土地へ移り続けられる限り、従う者の数に実質的な上限は生じにくい。狩猟民の国は近隣の文明国にとって脅威になりにくい一方、牧畜民の国は脅威となり得る。北米の先住民の戦争は規模も影響も小さいが、アジアで繰り返されたタタールの侵攻は凄惨であり、スキタイ人が結束すれば欧州とアジアの双方で抗しがたいというトゥキュディデスの見解は、歴史が一貫して裏づけている。広大で防御に乏しい平原に暮らすスキタイ人やタタール人の諸集団は、征服を志す遊牧の部族や氏族長の下にしばしば糾合され、そのたびにアジアにも甚大な惨禍と荒廃をもたらした。牧畜民のもう一つの大きな集団であるアラビアの不毛の砂漠の住民が一つに結集したのは、ムハンマドとその直後の後継者のもとでの一度きりであり、その結束は征服の論理というより宗教的熱情の産物で、その影響も際立っていた。もしアメリカ大陸の狩猟民が将来牧畜へ移行するなら、欧州の植民地にとって彼らは今よりはるかに危険な隣人となるだろう。

ある程度発展していても、対外交易が乏しく、各家が自家用の簡素な家内手工品を作る程度で製造業が未発達な農耕国では、ほとんどの人が兵士であるか、すぐに兵士にな

り得る。耕して暮らす人々は概して一日中野外で働き、四季の厳しさに身をさらす。こうした日常が戦闘の疲労に耐える力を養い、日々の必須作業の一部は軍務とも重なる。

溝を掘る作業はそのまま塹壕や陣地の構築に生かせ、畑を囲うのと同じ要領で野営地も固められる。余暇の遊びも羊飼いのそれに似ており、いわば模擬戦に近い。ただし農夫は羊飼いはじめ余暇がないため頻繁には行えず、兵士にはなれるが練度は高くない。それでも、彼らを戦場に立たせるために君主や共同体が負うべき準備の負担はほとんどない。

農業はどれほど素朴な段階でも定住を前提としており、住居は容易に手放せない資産である。したがって、専ら耕作に従事する国が戦時に入っても国民が一斉に出征することとはなく、少なくとも老人・女性・子どもは家を守るために残る。一方、軍役年齢の男子は原則として全員が出征可能であり、小国では実際に総動員する例も少なくない。軍役年齢の男子は総人口のおおむね四分の一から五分の一と見込まれる。作戦が種まきの後に始まり収穫前に終わるのであれば、主要な労働力である農夫らも大きな損失なく農場を離れられ、残る仕事は在郷の老人・女性・子どもで回せる。このため、短期であれば無給の従軍にも応じやすい。結果として、君主や共同体が負担する戦地での維持費は、動員準備費と同程度に抑えられる。古代ギリシャの諸都市の市民は第二次ペルシア戦争

後までこの方式で兵役に就き、ペロポネソスの諸都市でもペロポネソス戦争後まで同様だった。トウキデイデスは、彼らが夏季には収穫のために帰郷したと記している。ローマ人も王政期から共和政初期までは同様で、ウェイイ包囲戦に至るまで、出征者の維持費を在郷の者が負担することはなかった。さらに、ローマ帝国崩壊後に成立した欧州の君主制国家でも、封建法が厳密に整う以前から当分の間は、大領主が家臣団を率いて自費で王に軍役を奉じ、戦地でも在地でも王の給金に頼らず自家の歳入で賄った。

やがて社会が高度化・成熟してくると、出征者が自費で生活を賄う仕組みはもはや成り立たなくなる。主な理由は二つ、製造業の発展と軍事技術の高度化である。

遠征が種まきの後に始まり、収穫の前に終わるなら、農家が一時的に動員されても、その中断が直ちに大幅な減収に結びつくとは限らない。収穫までの過程の多くは自然が進めてくれるからだ。これに対し、鍛冶や大工、機織りなどの職人は、仕事場を離れた途端に収入が止まる。自然が仕事を肩代わりしてくれるわけではない以上、生計は自らの稼ぎに依存せざるを得ない。したがって、公の防衛に当たっている間は自前の収入で暮らせず、公費で支える必要がある。職人や製造業従事者の多い国では、戦時動員の主力がこの層から出るため、その期間の生活は公費で賄わざるを得ない。

やがて軍事は高度で複雑な技芸へと発展し、小競り合いや一度の会戦で決着がつくことは少なくなり、一つの戦役が年の大半を費やす長期戦が常態化した。これに伴い、公務として戦う者は、少なくとも従軍中は国家が養うべきものとなる。平時の職が何であれ、長期にわたる多額の費用を私費で負担させるのは過重だからである。第二次ペルシア戦争後、アテナイの軍は市民と外国人の混成となり、傭兵が主力となって国費で雇われ、給金を受けた。ウェイイ包囲戦以降、ローマ軍でも出征中の軍務に給金が支給されるようになった。封建制下でも、やがて大領主と直臣の軍役は金納へと切り替わり、その資金で代役の兵が雇われた。

戦争に従軍できる人口比は、未分化な社会よりも文明社会のほうが必然的に低い。兵士の生活は非兵士の生産に全面的に依存しているため、兵士の数は、非兵士が自分たちの暮らしに加え、政府や司法を担う官僚など公務部門の維持をそれぞれの立場に見合う水準で賄ったうえで、その余力で支えられる範囲を超えられない。古代ギリシャの自作農中心の小国では、住民の四分の一から五分の一が自らを兵とみなし、時に一斉に出動したという。これに対し、近代ヨーロッパの先進国では、兵役に就く人口比が百分の一を超えると軍事費の負担に国家が耐えられない、というのが一般的な見方である。

軍を戦地に送るための動員準備費が各国で重い負担と受け止められるようになったのは、戦地での維持経費を国家（君主制でも共和国でも）が全面的に負担する体制が確立してから、かなり後のことだ。古代ギリシャでは、国家が自由市民の教育に軍事訓練を組み込み、各都市に公設の練兵場を整え、公職者の保護と監督のもとで若者は複数の師範から多様な鍛錬を受けた。財政負担はおおむねこの簡素な枠組みにとどまり、ローマではマルスの野がギムナシオンに相当する役割を果たした。封建期の諸政体でも弓術などの訓練を求める命令が各地で出されたが、担当官の無関心や熱意の不足もあって徹底せず、制度が整うにつれて庶民向けの軍事訓練は次第に行われなくなった。

古代ギリシャとローマの共和政期を通じ、さらに封建制が成立したのちもしばらくの間、兵役は一部の市民が専業で担う独立した職業でも、特定の階層の主要な生業でもなかった。人々は、日ごろの職業や生計手段にかかわらず、平時には自ら兵としての務めを果たし、有事にはその役目を担うべき義務と責任があると考えていた。

軍事技術は諸技術の中でもとりわけ重んじられ、改良が進むほど不可避に複雑化する。その完成度や到達可能な上限は、機械技術などの関連分野と不可分で、その時々水準に規定される。その水準に至るには、ある層の市民がそれを唯一または主たる職とし、

他の技術と同様に分業を確立しなければならない。他の技術では、一人が多くを兼ねるより一業に専念したほうが有利だという個々の判断から、分業は自然に広がり定着する。だが、兵の業を他の職から切り離し、独立した専門職として制度化できるのは国家だけである。平穏な時代に、公的な後押しもなく軍事訓練に多くの時間を費やしても、腕は上がり気晴らしにはなるが、私益には直結しない。この特別な職務への投資を本人の利益と結びつける仕組みを設けられるのも国家だけだが、国家は、ときに存立の維持にそれが不可欠な局面でさえ、その工夫を欠いた。

羊飼いは余暇が多く、粗放な段階にある農民にもある程度のゆとりがある一方、職人や製造業に携わる人々にはほとんど余暇がない。羊飼いは損失なく訓練に多くの時間を割け、農民も多少は時間を割ける。だが職人は、わずかに時間を割いただけで収入が減るため、損得勘定からそれを避けがちである。さらに、技能や工業の発達に伴う農業の改良は、必然的に農民の余暇を職人並みにまで削る。その結果、軍事訓練は農村でも都市同様におろそかになり、国民の大多数は戦闘に不慣れになる。一方、農工の改良によって生産、すなわち富が増すほど、周辺からの侵攻を招きやすくなる。勤勉で、その帰結として富裕な国家ほど標的になりやすく、国家が公共の防衛のために新たな手立て

を講じないかぎり、日々の生活習慣は自衛力を根本から損なってしまう。

この状況で、国家が国防の最低限の備えを確保する道は二つしかない。

第一に、政府が強力な統治のもとで厳格な統制を敷き、国民の利害や資質・嗜好に反していても軍事訓練を義務づけ、徹底させる方法である。兵役年齢の市民には、職業を問わず、全員または一定割合に対し、本業のかたわら兵役の履行を義務づけることができる。

第二に、一定の人員を雇い入れて常時訓練・演習させる常設の体制を敷く方法である。さらに、その中から選抜した者を継続雇用・訓練すれば、兵を他の職務から切り離れた独立の専門職として確立できる。

軍備の柱をどこに置くかで、体制は二つに分かれる。民兵に依拠すれば軍事力の主軸は民兵となり、常備軍に依拠すれば主軸は常備軍となる。常備軍の兵は軍事訓練を専業または本務とし、国家からの給与や手当が生活の主な糧となる。民兵は訓練が断続的な務めにとどまり、主な収入源は別の生業である。民兵では労働者・職人・商人としての側面が兵としての側面より前面に出るのに対し、常備軍では兵としての身分が他の側面に優越する。本質的な違いはここにある。

民兵にもいくつかの形がある。国によっては、市民は防衛の訓練だけを受け、連隊のような常設編制に組み込まれず、専任の常設将校の指導下に置かれる独立部隊にも編成されない。古代ギリシャやローマの共和政では、市民は自宅や仲間内で訓練し、召集・出征が命じられるまで特定の部隊に所属しなかったとされる。一方、英国やスイスなど近代欧州の多くの国が採用した、いわば不完全ながら編制済みの民兵制では、平時から民兵を特定の部隊に配属し、常設の専任将校のもとで訓練を行わせる。

火器の発明以前は、武器の扱いの巧拙や体力・敏捷さに優れた軍が優位で、しばしば戦局を左右した。こうした技能は剣術のような一対一の個人技に近く、集団訓練よりむしろ、特定の師や互角の仲間との個別稽古で磨かれた。火器の普及後も体力・敏捷さや高度な熟練はなお重要だが、その相対的な比重は下がり、火器は未熟者と熟練者の差を小さくした。その運用に要る技能は、多人数での隊列・隊形の訓練で十分に身につくとみなされるようになった。

現代の軍では、規律と秩序、命令への即応性が、個々の武器熟練よりも勝敗を左右する。ただし、銃砲の轟音や濃い硝煙、砲火の下に入った途端に始まる見えない死の脅威は、本格的な交戦前からそれらの維持を難しくする。古代の戦いには人声以外の騒音も

煙もほとんどなく、目に見えない致傷要因も乏しかったため、致命的な武器が実際に迫るまで切迫した危険を感じにくかった。こうした条件のもとでは、武器の扱いに自信のある兵で編成された部隊なら、開戦時に限らず戦況の推移を通じて、一方が明確に敗れるまで一定の規律と秩序を保ちやすかった。もともと、規律・秩序・命令への即応は、大規模な隊形での反復練成を重ねた部隊にしか根づかない。

民兵は、いくら訓練や演習を重ねても、規律が徹底し練度の高い常備軍には及ばず、その差は埋まりにくい。すなわち、訓練の方法や水準にかかわらず、民兵は常備軍に対して常に不利である。

週に一度や月に一度しか訓練しない兵は、毎日または隔日で訓練する兵ほど武器の扱いが上達しない。現代では古代ほど訓練の巧拙が決定的ではないにせよ、プロイセン軍の優位が高い練度に支えられてきたことは周知であり、今日でも訓練の重要性はきわめて大きい。

週に一度や月に一度だけ上官の命に従い、それ以外は指揮系統の外で各自の用事を自分の裁量で処理している兵は、起床から就寝、少なくとも宿営に引き上げるまで一日の生活と行動を上官の指示に委ねている兵ほど、上官への畏れや即応的な服従心を保ちに

くい。規律、すなわち命令に即座に従う習性という点で、民兵は常備軍に比べ、銃器の取り扱いの技量差以上に大きく劣りがちである。しかも近代戦では、武器の扱いの巧拙より、この即応的服従の習性のほうがはるかに重要だ。

遊牧のタタール人やアラブ人の民兵のように、平時から同一の首長のもとにまとまり、その統率下で戦う集団は抜きん出て強く、上官への敬意や命令への即応性の点で常備軍に最も近かった。ハイランドの民兵も、氏族長の指揮下にあるかぎりには同種の利点をいくらか備えていた。とはいえ、彼らは遊牧ではなく定住の牧畜民で、それぞれ家を持ち、平時に首長の移動に従う習慣はない。このため、戦時でも長距離の行軍や遠征、長期の駐屯には消極的で、戦利品を得ると早々に帰郷を望み、氏族長の権威でも引き留めにくかった。服従心の点でも、タタール人やアラブ人に関して伝えられる水準には及ばない。さらに、定住ゆえ屋外で過ごす時間が少なく、軍事訓練や稽古に不慣れで、武器の扱いもタタール人やアラブ人ほどには熟達していなかった。

どの民兵であれ、数度の実戦を重ねれば、実質的に常備軍並みになる。行軍と日々の訓練を重ねて武器の扱いに習熟し、士官の統制下での行動に慣れるにつれて、命令への即応性も常備軍と変わらなくなる。出征前の身分や経歴はほとんど問題にならない。数

度の戦役を経れば、やがてあらゆる点で常備軍化する。米国でも一戦を経験すれば、民兵は、前の戦争でフランスやスペインの最精鋭の古参兵に少なくとも劣らないことを示した常備軍に、総合力で肩を並べるようになるだろう。

この区別を踏まえて史料を見れば、規律が徹底し、編制や装備の整った常備軍が、民兵に対して一貫して優位に立ってきたことは明らかである。